（前のページから）

さて、国が来年度から、「ヤングケアラー」普及啓発キャンペーンを予定しているという。

思い出すことに、以前「アダルトチルドレン」という言葉が世の中に広がったことがあった。原義的には「アルコール依存症の親に育てられて成人した子ども」のことで、やがて「機能不全家庭で育ち、生きづらさを抱えた人」という意味合いにも派生した。

一時期的によく耳にしたこの「アダルトチルドレン」も、言葉の響きなどからさまざまな誤解を振りまきつつ、いまやメディアに登場することもすっかりなくなってしまった。

「ヤングケアラー」を取り巻く議論も、これを一過的なもので終わらせないようにしなければならない。継続的な情報発信が大切になるし、そのうえで、実際の経験当事者が、顔や名前や肉声を通して自身の思いを届けることの意味合いは大きい。

名付けられた属性でひとくくりにされる概念ではなく、「どういう人がどういうふうに困っているか」という、その個別的な理解が大切になるはずである。

それで、困っている子どもがいたら、きちんと向き合って話を聞くことは、条例や法律など以前の「大人の責任」と思うのだけれど、家族を覆う分厚い呪いの層を踏み越えて進むためには、ときにそういう条例のような社会的強制力を利用することも必要になるかも知れない。

＊

ところでぼくの母親は生前、極度の仕事人間で、ろくろく家にもいないし、たまにいてもだいたい仕事の電話ばかりしているような人だった。必要があれば深夜過ぎでも起きだして、片道30分以上も田舎の真っ暗な道を運転して職場に出かけていった。振り返れば明らかに「家族」を犠牲にしている人だったが、仮に時間が戻ったとしても、母に生き方を変えてほしいとは特に願わない（かといって、自分も同じように生きたいとはぜんぜん思わない）。

どうしてそんな生き方が成り立ったかと言えば、もちろん周囲のサポートがあったからだし、それだけ母がまわりを頼ることが上手かったからだと思う。

「家族」は条件つきのものではないし、「家族」だけで抱えなければならない問題なんていうものも、本当はひとつもない。ぼく自身のなかにも、「こうあるべき」がたくさんくすぶっているからこそなお感じることに、常識を手放すことを怖がらないようにしたい。